

## カント「判断力」の一考察

塚 本 正 孝

15 (塚本)

「純粹理性批判」において、カントは理論理性を究明し、その対象界は自然であることを明らかにした。そこには機械的因果律の必然が支配する。また「実践理性批判」によつて、実践理性が究明せられ、その対象界は道徳であることが明らかにせられた。そこには自由が支配する。このように(上位)認識能力を理論理性と実践理性とに二分して究明することにより、自然と道徳、必然と自由、この両世界は明確に区別せられる。しかも両世界は、一方が他方へ影響し得ない別個の世界であるかの如く、両者の間には「見渡し難き深淵」がつくられている。しかしこのようなことに、体系全体を概観せんとする知的敏活性をもつ人、あるいは「公平と洞察と真の通俗性とをもつ人々」(Kritik der reinen Vernunft, B. XL.

「<sup>(2)</sup>」は満足し得ぬであろう。したがつて、この深淵を満し、理性体系を理性批判の精神において完成することは、新たにして最後の課題である。そしてこの課題に答えるものが「判断力批判」であることはいうまでもない。ここにおいて理論的世界観と実践的世界観との結合および批判哲学の体系が、意図せられたのである。

しかしながら「判断力批判」は、「純粹理性批判」による理論的世界観および「実践理性批判」による実践的世界観の完成後、両者を結合するべく、にわかに考案せられたものでは決してない。「全体そのものを作らずして、またたとえ単に批判の規則にしたがつたとしても、すべて全体の部分ということにおいて前もつて完全に明らかにせずして、いかなる基礎づけられた区分もなされ

得ないのである」(Erste Einleitung in die Kritik der Urteilskraft, S. 228, Cit. nach Cassirer)。また「分解(分析)は綜合の反対であるかのように見えるけれども、しかし常に綜合を前提するのである」(K. d. r. V., B. 130)。したがって(上位)認識能力を理論理性と実践理性とに分解することは、それらの綜合あるいは理性の体系をすでに前提していたと考えなければならぬであらう。まさに「体系は、虫類のように偶発生(generatio aequivoca)によつて、集積せられた概念の単なる融合から、最初は畸形的に、時のたつにつれて完全に形成せられたかのようと思われる。けれども、総じて体系はその図式をば、根元的萌芽として、単に自己を展開せしめる理性において、もつていたのである」(K. d. r. V., B. 863)。

一

自然現象は機械的因果の法則によつてのみ規定せられる。これに対して自由な行為は、道德法則によつてのみ規定せられる。悟性の働きは、自然概念によつて自然を説明することにある。理性の働きは、自由概念によつて自由すなわち究極目的を実現することにある。ここで自然と自由、自然概念と自由概念との結合が要求せられる

とき、悟性と理性との中間に一つの上位認識能力を想定することができよう。この中間の能力は、実践的なもののへの顧慮をはなれて、自然を自由概念すなわち目的の概念によつて表象する。あるいはこの能力が、自然のなかに究極目的の可能性の制約を、実践的なものへの顧慮をはなれて前提する。かかる表象の仕方あるいは前提の仕方は一つの判断Urteilである。そしてまさにかく判断するが故に、それは判断力Urteilskraftといわれるのである。

しかるに一般に判断することは悟性の働きである。したがって判断力が悟性と理性との中間に位置すべきであるならば、判断力の判断作用は、特有の能力として、悟性および理性の能力から区別せられねばならぬであらう。このため判断力が導き出すものは、悟性が導き出す理論的認識とは全く別のものでなければならぬ。認識判断においては、特殊者が、与えられている規則の下に包摂せられるか、あるいは規則が特殊者に対して適用せられる。このように「普遍者(規則、原理、法則)が与えられていれば、特殊者をその普遍者の下に包摂する判断力は(判断力が先験的判断力として、ただそれにしたがつてのみ、かの普遍者の下に包摂せられる諸制約を、先天的に指示するときでも)規定的bestimmendである。

しかるにただ特殊者のみが与えられていて、その特殊者に対して判断力が普遍者を見い出さなければならぬ場合には、判断力は単に反省的 reflektierendである」(Kritik der Urteilskraft, Einl., XXVII)。したがって判断力本来の働きは反省的判断力にある。しかし「特殊者を普遍者に含まれたものとして考える能力」である反省的判断力は、いかなる自然認識をも与えない。それは、単に自然について反省するにすぎない。すなわち「反省によつて可能となる概念に関係して、与えられた表象を、比較対照するか、あるいは、その(反省の)認識能力と比較対照するかである」(Erste Einl., S. 192)。かくすることによつて、たとえ自然の特殊的経験的諸法則の差別や不等性がいかに大きくとも、なおこのなかに或る種の同一性や秩序をもちこむことができるであろう。すなわち特殊的経験的諸法則を「あたかも或る悟性(たとえ我々の悟性ではないとしても)が、特殊的自然諸法則にしたがう経験の体系を可能ならしめるため、その特殊的経験的諸法則を、我々の認識能力のために与えたかの如くに」(K. d. U., Einl., XXVII) 表象することができよう。このとき「自然のままのカオスの集積」 ein rohes chaotisches Aggregat は統一的な「体系」 System として考察せられて

いるのである。このように特殊的諸法則が、悟性の普遍的自然法則の下で、いかに大きな不等性や差異性を示しても、なおこれを一層高い統一的法則へもたらすために反省的判断力は働く。すなわち「経験的特殊者 das Empirisch-Besondere から常に普遍者へ、経験的なものを、経験的諸法則の統一のために、よじのぼらせる」(Erste Einl., S. 192)、まさにこのために、「反省的判断力」は特殊者あるいは自然について反省するものである。

しかるにこの場合、自然は「(我々の)悟性が、その多様の規定原理を含んでいる」というように表象せられるのではない。むしろ自然は「あたかも或る悟性が、その経験的諸法則の多様の統一根拠を含んでいるかの如くに」(K. d. U., Einl., XXVII) 表象せられるのである。いかにえるならば、自然の多様の規定原理あるいは統一根拠が「ある」というようにはなく、「あるかの如くに」表象せられるのである。そのためには技巧 Technik が必要である。すなわち自然の多様は、機械的にあるいは図式的にはなく、「技巧的に」 technisch あるいは「芸術的に」 künstlerisch 表象せられる。かくすることによつて自然の多様は統一体としてとらえられる。したがって自然の多様は「自然の技巧」 Technik der Natur (Erste

Einl. S. 196) の概念においてその統一性を示すのである。

また伝統的形而上学は、普遍者が自己を特殊化するこ  
とによつて、個物が形成せられると考える。これになら  
つて、単に主観のなかに想定せられた普遍者が、自己を  
特殊化することによつて、自然の多様を形成したという  
ように考えるとき、そこには自然の多様の体系的統一的  
理解が成立する。したがつて自然は「自然の特殊化」  
Spezifikation der Natur の概念においてその統一性を  
示すといふ得るのである (Erste Einl. S. 195-6, K.d. U,  
Einl. XXXVII)。

しかるにかゝる自然の体系的統一は、決して普遍者あ  
るいは神の現存を前提するものではない。特殊者に対し  
て普遍者を求めその統一を図らんとする判断力は、自然  
が、我々の判断力のために、体系的統一を示すことを前  
提しているのである。すなわち自然の体系的理解は、自  
然のなかに体系的統一の表象を前提するのである。この  
ように「そのものの現存が、そのものの表象を前提して  
いる如く見えるところのものを、我々は合目的 Zweck-  
mäßig と名づける」 (Erste Einl. S. 197)。かくして自然  
はまた「自然の合目的性」 Zweckmäßigkeit der Natur  
の概念において、体系的統一性を示すのである。

かくして「自然の技巧」「自然の特殊化」「自然の合  
目的性」などの概念において、反省的判断力は、自然を  
体系的統一として、とらえるのである。しかしながらこ  
れらの概念は自然概念でも自由概念でもあり得ない。と  
いうのはこれらの概念は全く何物をも客体に付与しない  
からである。自然の技巧、自然の特殊化、自然の合目的  
性などの概念は、統一的な経験を目指して我々が自然の  
諸対象について反省するにあたつて、いかなる手続きを  
とらねばならぬかの、唯一の様式を示しているものでは  
ある。したがつてこれらの概念は、判断力の主観的原理で  
あるといえよう。しかるにこの自然の合目的性の概念は  
単に主観的原理にとどまるものではない。それは先天的  
にして、なお先験的原理なのである。実際、自然現象は  
無数に多様である。そしてそれらの自然の多様に対して  
数多くの経験的諸法則が妥当する。しかしながらそれら  
の法則は、我々の洞察に対してすべて偶然者としてあら  
われる。すなわち悟性は経験的諸法則を偶然者として承  
認する。これに対して反省的判断力は、この偶然者を、  
あたかも一つの下に統一せられた全体の一部であ  
るかのように表象することによつて、すなわち合目的性  
の原理によつて、法則的統一を含むものとして、判定す

zu beurteilen。したがって合目的性は「偶然者の合法則性」[Gesetzmäßigkeit des Zufälligen (Erste Einl., S. 198 K. d. U., 34d)]ともいわれる。しかるにいまかかる合目的性の原理を想定しないとするならば、一切の反省は当がなくなり、盲目になり、いかなる体系的経験も成立しないであろう。このようにこの原理は体系的経験を成立させるものであつて、決して経験からは導き出されない。それ故合目的性の原理は先験的原理なのである。

ところで経験的諸法則つまり偶然者を一つの原理の下に結合し得るということ(偶然者の合法則性)を発見するならば、その発見は著しい快感の根拠ともなり、またしばしば感歎の根拠ともなる。しかも感歎を起す対象を我々が十分に熟知してもなおやまないような感歎の根拠となる。これに対して多数の偶然者を一つの原理の下に結合し得ないと表象するならば、このことは我々に満足を与えず、不快感を起させるであろう。何故なら、このように表象することは「自然の諸々の類における自然の主観的・合目的特殊化の原理に撞著し、また自然の諸々の類に関する我々の反省的判断力に撞著する」(K. d. U., Einl., XLII)からである。したがって判断力の先験的原理である合目的性の原理は「快あるいは不快の感情」

Gefühl der Lust und Unlust と結びついているといえよう。悟性の先天的原理である合法則性が認識能力と結びつき、また理性のそれである究極目的は欲求能力と結びついた。これと同様に判断力の原理である合目的性は快・不快の感情と結びつくのである。したがって単に主観的(あるいは形式的)妥当性を有する自然の合目的性の原理は、ただ我々の心情力の合目的関係のなかに、すなわち快・不快の感情のなかに存するのである。

以上において明らかになったように、判断力は先験的原理として、(自然の)合目的性(自然の技巧、自然の特殊化)を有し、心情能力に関しては、快・不快の感情のなかに存する。そして合目的性の原理は、悟性の原理である合法則性のように、一切の現象に対して妥当する。しかし客観的意味においてはなく、単に主観的意味においてである。また規定的ではなく、単に反省的である。悟性は合法則性を、認識能力に対してだけではなく、すべての感性的あるいは経験的客体に対しても指令する。また理性は究極目的すなわち自由を、単に純粹意志に対してだけではなく、感性的あるいは経験的意志に対しても指令する。これに対して判断力は、合目的性による自然統一の法則を、自己自身に対してのみ指令

する。このように判断力は、法則を与えるが故に「自律性」Autonomieを有する。しかし判断力は、この法則をただ単に自己自身に対してのみ与えるが故に、悟性の立法と理性の立法とからの区別において、「自己自律性」Heautonomieとされるのである (Erste Einl., S. 205, K. d. U., Einl., XXXVII.)

## 二

これまでの論述において明らかになつたように、反省的判断力は、自然の多様を体系として考察せんとする要求、あるいは自然探求の原理を確立せんとする要求から発見せられた。しかるに「純粹理性批判」の「先驗的弁証論」および「先驗的弁証論附録」において論究せられてゐる「先驗的理念」transzendente Ideen あるいは「純粹理性概念」reine Vernunftbegriffe も、認識の体系を目指す。また自然探求の方法を示すのである。第一に思维的主観の究明にあつて (心理学において)、先驗的理念は我々に対して「我々の心性の現象の統一」あるいは「思维的主観の絶対的統一」すなわち「靈魂」Seele 理念を求めるべきであることを示している。第二に自然現象の究明にあつて (宇宙論において)、先驗的理念

は我々に対して「現象の制約の系列の絶対統一」すなわち「世界」Welt 理念を求めるべきであることを示している。第三に世界の秩序とその体系の究明にあつて (神学に関して) 先驗的理念は我々に対して「思惟一般のあらゆる対象の制約の絶対的統一」すなわち「神」Gott の理念をもとめるべきであることを示している (K. d. r. V., B. 379, 380, 391)。このように「この理念は悟性認識の完全な統一を要請する。これによつて悟性認識は単に偶然的集積ではなくて、必然的法則にしたがつて関連せる体系となる。元来我々はこの理念を客体の概念というわけにはゆかない、かえつて客体の諸概念の汎通的統一の概念である。この統一が悟性に対して規則として役立つかぎりにおいて。このような理性概念は自然からはくみとられない。むしろ我々はこの理念にしたがつて自然を探求する。そして我々の認識がこの理念に合致せざるかぎり、認識を不完全だと考えるのである」(K. d. r., B. 673)。したがつて「理念は本来単に発明的 heuristisch 概念であつて、明示的 ostensiv 概念ではない。また理念は、いかに対象が構成せられているかをば示さないで、かえつて理念を手引として、いかにして我々は経験一般の対象の性質および連結を探求すべきか、

を示すのである」(K. d. r. V., B. 699)。このような先験的理念の働きは、自然の多様を体系と見なすところの「判断力の論理的使用」logischer Gebrauch der Urteilskraft (Erste Einl., S. 195) と同一であるとも考えられよう。それ故我々はシュタットラーと共に一応は「反省的判断力の仮説は、第三の先験的理念と同一である」(Stadler, Kanis Teleologie, S. 36) と主張し得るであろう。このように考えるならば、「判断力批判」の序論は、新たな出发点と観点とから与えられた先験的理念の経験的使用の叙述であると、観ることもできよう (Ebd., S. 45)。我々はこのような考え方に一応は同意するのであるが、しかしながらなお問題が残されているように思われる。何故なら、判断力の原理と先験的理念とは、それらの導出方法に関して差異が観られるからである。

「判断力批判」の序論においては、原理の導出が経験的事実からの要請として行なわれている。すなわち「自然の諸形態は極めて多様であつて、いわば普遍的先験的自然の諸概念にも極めて多くの変様があり得るのである、……したがつてこの多様な形態のためにも、また法則がなければならぬ。かかる法則は経験的法則として我々の悟性洞察からみて偶然的なものであらうとも、しか

しなお(自然という概念がそれを要求している如く)法則といわねばべきであるならば、——たとえ我々に未知であつても——やはり多様統一の或る原理から必然的なものとして見られなければならない」(K. d. U., Einl. XXVI)。この原理が反省的判断力の原理すなわち合目的性なのである。

さらにまた「すべての経験的表象の比較は、経験的諸法則およびそれにしたがう特殊的——この経験的諸法則の比較を通してしかもまた他の経験的諸法則と種的に一致するところの——諸形式を自然物において認識するためともかく次のことを前提する。すなわち自然はまたその経験的法則に関して、我々の判断力に適したある節約および我々にとつて把握し得る一様性を認めていることを前提する。そしてこの前提が、判断力の原理として、先天的にすべての比較に先立たねばならない」(Erste Einl., S. 194)。

これら二つの引用からも明らかであるように、前者においては、「自然の多様な形態」ということ、後者においては「すべての経験的表象の比較」ということ、これらの経験的事実を手引として、判断力の原理がもとめられている。しかるに、これに対して先験的理念の導出で

は超驗的色彩が強くなっている。カントはいう。「判断の形式は範疇を産出した……。これと同様に理性推論の形式を範疇の例にならつて直観の綜合的統一に適用すればそれが特殊な先天的概念の根元をふくむであろうことは、我々の期待し得るところである。そしてこの概念は純粹理性概念あるいは先驗的理念と名づけられ得るもので、それはすべての經驗の全体における悟性使用を原理にしたがつて限定するであろう」(K.d.r.V., B. 378)。

ここでは先驗的理念が、範疇との類比において、「理性推論の形式を直観の綜合的統一に適用する」ことによつて、導出されている。さらに先驗的理念が靈魂・世界・神の三種にわかれることに關しては、「純粹理性概念は悟性が範疇によつて表象する關係の種類が存するのと同数だけ存するであろう」(K.d.r.V., B. 378)といわれている。したがつて先驗的理念の導出は、反省的判断力の原理のように、經驗的事実を手がかりにしているものではない。それは範疇との類比によつてもとめられている。

「その先驗的演繹は成就せしめられない」(K.d.r.V., B. 693)。しかしこのようにして導出せられた先驗的理念は、經驗的事実を処理する際、非常に役立つのである。

かくして「判断力の批判」の序論においては、經驗的

事実から先驗的原理である合目的性が導出せられている。これに対して先驗的弁証論においては、經驗的事実からはなれて、範疇との類比によつて先驗的理念が導出せられている。しかしこのような原理の導出方法の差異は、ただ單に方法の差異のみにとどまるものではないと思われる。一般にいわれているように、事実から出てその根柢をもとめるという方法が、いわゆる批判的方法である。そこでいまこの観点から考えるならば、「判断力批判」の序論においては事実から出てその先驗的原理(合目的性)がもとめられている故、その方法あるいはその根柢に横たわっている態度は、先驗的理念のそれよりも、いつそう批判主義に徹したものといわなければならない。したがつてシェアトラーのいうように「……判断力批判の序論を先驗的理念の經驗的使用の叙述として観る」(Ehrl. S. 45)と端的に断言し得ぬのではなからうか。したがつて、また判断力の原理である合目的性は先驗的弁証論においては單に萌芽として存していたのであつて、それが本格的に成長したのはやはり「判断力批判」においてであると考えるのが妥当ではなからうか。



「自然は、集積としてのその所産に關しては機械的に單なる自然 *bloße Natur* として振舞う、しかるに体系としての自然、例えば結晶形成やすべての花の形態に關しては、あるいは植物や動物の内面的構造においては、技巧的にすなわち同時に *Kunst* として、振舞う」(*Erste Einl.*, S. 198)。のように自然は判断力の論理的使用によつて、すでに *Kunst* として理解せられるべき可能性を獲得していたのである。結晶形成や花の形態は、我々に対して「自然美」*Naturschönheit* としてあらわれ、植物や動物の内面的構造は我々に対して「自然目的」*Naturzweck* としてあらわれる。自然美あるいは美についての判断は「美的判断」*ästhetisches Urteil* といわれ、自然目的についての判断は「目的論的判断」*teleologisches Urteil* といわれるのである。

美的 *ästhetisch* 判断は、「*ästhetisch*」という言葉がまた「感性的」という意味をも示していることからわかるように、感性的・直観的であり直接的である。したがつて美的判断は規定的認識のためにいかなる客体の概念をも前提しない。むしろそれは直接に対象の形式に關係して、その形式を単に主観的根拠から「覚知」*apprehensio* する。この覚知が反省的判断力の原理つまり合目的

性に適合するならば、すなわち、構想力(先天的直観の能力としての)と悟性(概念の能力としての)とが無意図的に調和の状態に到るならば、それは快の感情をとまなうであろう。それ故この快感は客体の「主観的あるいは形式的合目的性」*subjektive oder formale Zweckmäßigkeit* の表現であるといえよう。しかしまた逆に客体の合目的性の形式は快感の根拠であるともいえよう。このように「ある対象の形式(感覺としての、その対象の表象の質料ではなく)が、それについて單に反省するとき(対象から獲られる概念を顧慮せずに)、かかる客体の表象における快の根拠として判定せられるならば、かかる快はまたこの客体の表象と必然的に結合したものと判断せられ、したがつて單にその形式を把握する主観に対してだけではなく、すべての判断者一般に対して快なりと判断せられる。このとき対象は美しいといわれ、そのような快によつて(したがつてまた普遍妥当的に)判断する能力が趣味 *Geschmack* といわれる」(*K. d. U.*, *Einl.*, XLV)。あるいはまた「美的判断力」*ästhetische Urteilskraft* ともいわれる。

これに対して、單に対象の形式あるいは表象においてではなく、自然の事物における合目的性についての判断

は、目的論的判断である。したがってそれは客体の概念を前提する、そして原因と結果の法則にしたがう客体の可能性について判断する。あるいは、それは事物の可能性の根柢におかれるところの概念すなわち自然目的と、客体の表象とを結合するのである。いいかえれば、目的論的判断は、それで有るところの事物の表象と、それで有るべきところの事物の概念、すなわち目的概念とを比較する。そしてこの事物の表象が目的概念と合致するとき、その事物における合目的性が表象せられる。したがってまたその事物は自然目的として判定せられる。しかるに、「かかる合目的性の表象は、客体の形式を、それを覚知する主観の認識能力に関係づけるのではない、むしろある与えられた概念のもとにおける対象の規定的認識に関係づけるのである」(K. d. U., Einl., XLV). すなわちかかる合目的性は悟性と理性によつて、概念にしたがつて論理的に判定せられるのである。このようにそれは客観的根柢から表象せられているので、「客観的あるいは實在的合目的性」 *objektive oder reale Zweckmäßigkeit* といわれる。またかかる客観的合目的性を判定する能力が「目的論的判断力」 *teleologische Urteilskraft* といわれるのである。

かくして美的判断はいかなる対象の概念をも前提しないのに対して、目的論的判断は、理性が合目的性の原理の下でもたらすところの、客体の概念を前提する。また美的判断は単に対象の形式あるいは表象の合目的性に関する判断である。これに対して目的論的判断は自然の事物における合目的性に関する判断である。さらにまた、美的判断は悟性と構想力によつて対象を合目的に表象する。すなわち対象を美なりと表象する。これに対して目的論的判断は悟性と理性によつて対象を合目的にとらえる。すなわち自然目的としてとらえる。約言すれば、両者にあつて自然の事物は反省的判断力によつて技巧的として、すなわち合目的的として考察せられるが、しかし前者では主観的に、主観の単なる表象様式への関係においてのみ考察せられ、後者では客観的に、合目的に対象そのものの可能性への関係において考察せられるのである(Einl. S. 229)。

このため「判断力批判」は美的判断力の批判と目的論的判断力の批判とに、あるいは美学と目的論とに区分せられる。ところで先にも述べた如く「判断力批判」は必然と自由との間にある深淵を満し、理性批判の精神において体系的統一を完成せんとする課題に答えるものである。

る。しかし「判断力批判」が美学と目的論とに二分せられたままでは、かかる課題を解決し得ぬであろう。その解決のためには、「判断力批判」を統一的内容をもつものとして理解しなければならない。したがってここに美的判断力と目的論的判断力との関係が必然的に問題になる。

「判断力批判」を先験的理念の経験的使用の叙述と考へ、目的論の認識論の意味を明らかにせんとしたシュタットラーは、カントが「判断力批判」において美的判断力と目的論的判断力とを一括して論じたことを批判している。すなわち「一括ということのために被害を受けたのは、主として判断力の認識論的収獲の把握であつた」(Ehd. S. 26)と彼は述べ、目的論的判断力に優位を与へ美的判断力つまり趣味を低く評價している。そして美的判断力に関しては、目的論的判断力とは別の一部門が必要であつたことを力説している(Ehd. S. 28)。

また目的論によつて自然概念と自由概念とを統一せんとした田辺博士は、美的合目的性について次の如く述べている。「その合目的性は単に表象の形成に於ける主観の意識活動の調和的自足的なる統一に成立し、対象の实在性に関わりなく、所謂遊戯の対象界としての仮象に関

する。従つて古来因果性と対立せしめられ、实在界の規定として、之と権限を争ふ合目的性には直接関係がない。必然と自由、自然と道德との対立は具体的に美の合目的性には含まれない」(田辺元「カントの目的論」23頁)。すなわち美的合目的性は、単に主観的であるが故に、自然と道德、理論の世界と実践の世界との統一には全く関与しないものと考えられている。

このように両者のいずれにおいても美的判断力、美的合目的性は批判哲学の体系上、重要なものとして考察せられていない。しかしながら(上位)認識能力の機能を体系的に考えるとき、かかる考察が必ずしも妥当的とはいへ得ぬのではなからうか。(上位)認識能力のうち「悟性は感官の客体としての自然に対して先天的に立法の *gesetzgebend* であり、かくて可能的経験における自然の理論的認識が成立する。」すなわち悟性は自然の世界あるいは自然の理論的認識に対して「構成的原理」*konstitutives Prinzip* を与える。「理性は主観のうちの超感性的なものとしての自由と自由に固有な因果性に対して先天的に立法的であり、かくて無制約的・実践的認識が成立する」(K. d. U., Einl., VIII)。すなわち理性は実践の世界あるいは実践的認識に対して構成的原理を

与える。しかるに「ただ単に実践的なものにおいてのみ理性は立法的であることができ、(自然の)理論的認識に関しては、理性はただ(悟性を介して法則告知的 *gesetztkundig* として)与えられた諸法則から推論によつて帰結を引き出し得るにすぎないのであり、それらの帰結はあくまでもただ自然の範囲内に限られていなければならぬ」(K. d. U., Einl., XVII)。このように理性は自然の認識に関しては単に法則告知的に関与する。すなわち自然に対しては構成的原理ではなく、「統制的原理」*regulatives Prinzip* を与える。しかしながら悟性本来の働きは自然に対して立法的であり構成的原理を与えることであるように、理性本来の働きも実践的認識つまり自由に対して立法的であり構成的原理を与えることである。したがつて理性は実践の世界に対して積極的意味をもつ。これに対して理性が自然に関して単に法則告知的であり統制的原理を与えるとき、それは消極的意味をもつにすぎない。このため(上位)認識能力がそれ本来の働きを示して積極的意味をもつのは、どこまでも立法的であり、対象に構成的原理を与える場合であるといえよう。このような観点から判断力を考察するならば、悟性と理性との間を統一的に媒介する判断力がそれ本来の働

きを示して積極的意味をもつのは、それが立法的であり構成的である場合であるといわなければならない。これに対して判断力が消極的意味をもつのは、統制的である場合である。したがつて判断力が積極的に働いて自然概念と自由概念との間を統一的に媒介するためには、それが立法的すなわち構成的でなければならぬであろう。そこで我々は、判断力が積極的意味をもつことを、すなわち立法的であり構成的であることを、美的(主観的)合目的性つまり美において観るのである。あるいは判断力のうち、美に関する判断力のみが立法的であり構成的であることを観るのである。

すなわち「あるものが美しいか否かの判断に関しては、美的判断力がそれ自身に立法的 *gesetzgebend* である」(K. d. U., 252)。

また美的合目的性つまり美は「直観の合目的形式」ともいうのであるが、これに関しては次のように述べられている。「合目的的諸形式が概念の表出を用意しているのと同じように、判断力が合目的的諸形式をつまみ覚知のために見つけ出す *entfinden* とき、判断力は直観の合目的的諸形式を先天的にそれ自身に指示し構成し *konstruieren* 得る」(Erste Einl., S. 212)。

さらにまた「自然の合目的性なる判断力の概念の機縁となるところの——(自然あるいは芸術の)ある種の対象に關しての——美的判断は、快・不快の感情に關しては、構成的原理 *konstitutives Prinzip* である」(K. d. U., Einl., LVII)。

このように美的判断力は美に關して立法的であり、また判断力が直観の合目的的形式すなわち美を構成し、さらにまた美的判断は快・不快の感情に關して、すなわち美に關して構成的原理なのである。いいかえれば美の合目的性は判断力に対する構成的原理なのである。これに對して客觀の合目的性すなわち自然目的は、判断力に對する統制的原理である。

すなわち「自然の合目的性なる判断力の概念は、未だ自然諸概念に属するものではあるが、しかしそれは単に認識能力の統制的原理 *regulatives Prinzip* であるにすぎなく」(K. d. U., Einl., LVI)。

また「それ自体における自然目的としての事物の概念は、したがつて悟性あるいは理性の構成的概念ではない、しかし反省的判断力にとつての統制的概念 *regulativer Begriff* であり得る」(K. d. U., 294)。

さらにまた「自然の所産におけるその合目的性の概念

は、自然に關する人間の判断力にとつては必然的概念である。しかし客體そのものの規定に關わる概念ではない。したがつてこれは判断力に対する理性の主觀的原理であつて、これが統制的 *regulativ* (構成的ではなく) 原理として見られるならば、あたかも客觀的原理であるかのように、我々人間の判断力に對して必然的に妥当するのである」(K. d. U., 344)。

このように事物における合目的性、すなわち客觀の合目的性あるいは自然目的は、判断力に對する統制的原理であるのは明らかであろう。いいかえれば、自然目的を判断力が見出すとき、それは統制的に働いている。しかし統制的に働くが故に、判断力は消極的に働いている。これに對して判断力が美的合目的性を覺知するとき、それは構成的にすなわち積極的に働くのである。まさにこのときこそ悟性と理性との中間に位置する判断力は、それ本来の能力を示し、必然と自由、理論的世界と実践的世界との統一をなし得るのである。またこのように目的論的判断力ではなく美的判断力に、目的論ではなく美学に優位を与えるとき、「判断力批判」は統一的に理解せられるのである。したがつて「判断力の批判なるもののうち、美的判断力を含む部門が、本質的部門としてこれ

に属する。何故なら、美的判断力のみが、全く先天的に自然に関するその反省の根柢に判断力の置く原理を含むからである。しかししてその原理とは、特殊的(經驗的)法則にしたがう自然の、我々の認識能力に対する形式的合目的性——この合目的性がなくしては悟性は自然を理解することを得ないであろう——の原理なのである」(K. d. U., Einl., J.)<sup>②</sup>。かくてこのように美的判断力に優位を与えることは、理性批判の精神にかなうものといひ得るであらう。

註① 「判断力批判」において美的判断力に優位を与える考え方はクルノー・フィッシャーにおいても見られる。すなわち「悟性と理性との間の間隙を満すことは、本来単に、純粹に觀察的に働いてしかも認識的には働かないところの美的判断力によつてのみ生ずる。これに対して目的論的判断力は、たとえ認識をつくらないとしても、認識に役立つのである」Kuno Fischer, *Geschichte der neuern Philosophie*, Bd. V: S. 428)。

② 目的論に優位を与えんとするシュタットラーは、「判断力批判」の序論八節のこの文章について、独自の解釈を述べている(Stadler, *Kants Teleologie*, S. 28-29)。しかし八節を素直に読むならば、かかる解釈は無理であるように思われる。

## 大谷学報 第四十二卷 第二号

### 親鸞における社会観の構造(上)

..... 柏原祐泉

### 大無量寿經における三偈の位置

について..... 幡谷明

——選択・回向・成就の意味——

### アメリカにおける現代思想と

宗教研究(上)..... 佐々木現順

法律学における自力道と他力道..... 篠岡博

ドイツ通信..... 清沢哲夫